

山口至江之部著

# 靈界物語



出口王仁三郎著

〔靈界物語 第一卷〕

# 靈界物語

子の巻



著者 出口王仁三郎聖師



高熊山岩窟



黄金閣

別名を言霊閣とも言う、  
第二次大本弾圧事件前まで、  
神苑内に存在した建造物です。

戦前に出版された『霊界物語』  
第一巻の巻頭には聖師様が  
高熊山岩窟に居られる写真と、黄  
金閣の写真がある為、これに倣い  
収録いたしました。

## 序

この『靈界物語』は、天地剖判の初めより天の岩戸開き後、神素盞鳴命が地球上に跋扈跳梁せる八岐大蛇を寸断し、ついに叢雲宝剣をえて天祖に奉り、至誠を天地に表わし五六七神政の成就、松の世を建設し、国祖を地上靈界の主宰神たらしめたまいし太古の神代の物語および靈界探険の大意を略述し、苦・集・滅・道を説き、道・法・礼・節を開示せしものにして、決して現界の事象にたいし、偶意的に編述せしものにあらず。されど神界幽界の出来事は、古今東西の区別なく、現界に現われ来ることも、あながち否み難きは事実にして、単に神幽両界の事のみと解し等閑に附せず、これによりて心魂を清め言行を改め、靈主体従の本旨を實行されむことを希望す。

読者諸士のうちには、諸神の御活動にたいし、一字か二字、神名のわが姓名に似たる文字ありとして、ただちに自己の過去における靈的活動なりと、速解される傾向ありと聞く。実に誤れるの甚だしきものというべし。切に注意を乞う次第なり。

大正十年十月廿日 午後一時

於松雲閣 瑞月 出口王仁三郎誌

靈界物語……人生の本義を世人に覚悟せしめ、時代の悪弊を被い清め地上に天国を建て、人間の死後は直ちに天国に復活し、人生の本分を尽くさしめようとして説かれたもの。

天の岩戸開き……もとは天界の話だが、一般には互いの疑いが晴れ清々しく心が開かれたこと。

神素盞鳴命……誠の根本神が肉体を持たれて現世に現れ、地球上にはびこる悪をうち払い、地上の世界一切に神の教えを世に広めてミロクの世界を樹立される神の名。

八岐大蛇……悪魔の張本。

叢雲宝剣……素盞鳴尊が悪魔の張本たる八岐大蛇を退治された時にその尾から出た剣。

天祖……天の御先祖の神の意で、天御中主大神・高皇産靈大神・神皇産靈大神、またその顕現神である天照皇大神・伊邪那岐大神・伊邪那美大神のこと。また天の御三体の大神さまとも生る。

五六七神政……神さまの理想とされる世界。

松の世……神さまの経綸が完成した暁の称。ミロクの世界・天国の世も同じ意。「松」には「待つ」の意も籠められている。

国祖……地上神界の主宰神にます国常立尊。靈界物語では国治立尊として地の御先祖とある。

地上靈界……地上大地にも靈界(神界)中有界・幽界(と現界)の区別がある。

神界・幽界……天国と地獄。つまり神界は神と人が歓喜して住むところであり、幽界は罪深き靈魂や邪神のおちゆく境域、また修行するところ。

靈主体従……宇宙の一切はすべて靈(魂)を主とし物質(体)を従としてつくられているということ。瑞月……出口王仁三郎聖師が神命によって授けられた雅号。

出口王仁三郎……幼名上田喜三郎。明治四年旧曆七月十二日、丹波六太に生まれる。

瑞月

大宇宙スメール山を笠にきて

億兆無数の宇宙を踏まむ

惟神スメール山を笠にきて

無数の宇宙を踏破せむとす

天の下隈なく誠の大道を

教へ伝ふる瑞御魂かな

目次

発端

第一篇 幽界の探険

第一章 霊山の修業

第二章 業の意義

第三章 現界の苦行

第四章 現実的苦行

第五章 霊界の修業

第六章 八衢の光景

第七章 幽庁の審判

第八章 女神の出現

第九章 雑草の原野

第一〇章 二段目の水獄

第一章 大幣の霊験

第二篇 幽界より神界へ

第二章 顕幽一致

第三章 天使の来迎

第四章 神界旅行(一)

第五章 神界旅行(二)

第六章 神界旅行(三)

第七章 神界旅行(四)

第八章 霊界の情勢

第九章 盲目の神使

第三篇 天地の剖判

第二〇章 日地月の発生

第二一章 大地の修理固成

第二二章 国祖御隠退の御因縁

第二三章 黄金の大橋

第二四章 神世開基と神息統合

第四篇 竜宮占領戦

第二五章 武蔵彦一派の悪計

第二六章 魔軍の敗戦

第二七章 竜宮城の死守

第二八章 崑崙山の戦闘

第二九章 天津神の神算鬼謀

第三〇章 黄河畔の戦闘

第三一章 九山八海

第三二章 三個の宝珠

第三章 エデンの焼尽

第四章 シナイ山の戦闘

第五章 一輪の秘密

第六章 一輪の仕組

第五篇 御玉の争奪

第七章 顕国の御玉

第八章 黄金水の精

第九章 白玉の行衛

第四〇章 黒玉の行衛

第四一章 八尋殿の酒宴(一)

第四二章 八尋殿の酒宴(二)

第三章 丹頂の鶴

第四章 緑毛の亀

第五章 黄玉の行衛

第六章 一島の行衛

第七章 エデン城塞陥落

第八章 鬼熊の終焉

第九章 バイカル湖の出現

第五〇章 死海の出現

附記 霊界物語について

あとがき

## 基本宣伝歌

朝日は照るとも曇るとも たとえ大地は沈むとも 誠の力は世を救う	月は盈つとも虧くとも 曲津の神は荒ぶとも
三千世界の梅の花 開いて散りて実を結ぶ この世を救う生神は	一度に開く神の教 月日と地の恩を知れ 高天原に神集う
神が表に現われて この世を造りし神直日 ただ何事も人の世は 身の過は宣り直せ。	善と悪とを立別ける 心も広き大直日 直日に見直せ聞直せ

### 基本宣伝歌

まず基本宣伝歌の一節、二節、三節はそれぞれ五行、六行、七行からなっており、五六七(ミロク)すなわち瑞霊の宣伝歌なのです。

第一節目の内容は、地教山にまします野立姫の神の神示を各宣使がそれを背中にして宣伝の旅に出る。つまり瑞霊の救世の教を受けて出発する。そして結び句の「誠の力」について聖師さまは「誠と言つ字は言を戒すとある。その言は上に、がある。この、は玉の意であつて、主(○)の霊と言つ。三ノ口というのは、三つの御霊の口ということで、結局三つの神霊の言霊と言つことである。救つということ最高至上の権威を持つものでないと出来ぬ。万有一切の創り主でなくてはならぬ。そこで主の神の神格、神権を持つ瑞の神霊が誠であり、世を救う力を持っているのである。世を救う力は瑞霊の教え、誠よりほかにあると思つな」と断言されています。

第二節は天教山での国祖の神示内容です。その時の「梅の花」の意味ですが、「木の花とは梅の意なり。梅の花は花の兄と言ひ、兄をコノカミと言つ。木の花とは桜の花に非ざることを知るべし」……「顕幽神の三界を守らせたまう木花姫のことを、仏者は称して観世音菩薩といい、最勝妙如来ともいい、観自在天ともいふ」と語られつつ聖師と関係づけられる。梅が聖師さまのことであるならば、「一度に開く神の教」は瑞霊の教え神徳が明らかになることで、その瑞霊の手足となつて働くべく、人が集いあつてゆく様が歌われているわけです。

第三節は五大教と三大教の教理が複合された形です。神の裁きと救いが、そして人々の反省と立直りが籠められています。この基本宣伝歌はすべて瑞霊神の讃えの歌でもあります。